

『ジーニアス和英辞典』で、 英語教育の花を咲かせよう



中邑光男

どうして英語学習者は和英辞典も使うほうがいいのかだろうか。

日本語の語句，特に名詞をどう英語で言うべきか分からない場合に，和英辞典が役立つことは言うまでもない。英語教員の中には，ネイティブスピーカーと和食を食べに行き，「鮎」(sweetfish) や「はも」(daggertooth pike conger) などを英語で説明しなければならなくなった人もいようだろう。そのような時，手元に和英辞典がなければ，This fish is a Japanese delicacy that is often eaten in the summer.などのように fish という一般的な語句で表現するしか方法はない。

しかし和英辞書は，このような「調べ学習」をするだけのものではない。本稿では『ジーニアス和英辞典』(以下、Gje3) に焦点を当て，和英辞書を使うことによって得られる2つの大きなメリットを述べてみたい。

①使い分け情報を知ることができる

Gje3の最も重要な特徴は，日本語を英訳する際の「使い分け情報」をできるだけ示した点にある。

例えば，生徒に「宿題」を意味する英語の表現を教える場合を考えよう。「宿題」の訳としては homework がよく知られているが，これは work that is given by teachers for students to do at home (OALD 9) という意味，つまり「家庭で学習する課題」を表している。しかし「宿題」の中には，家庭ではなく，例えば，学校の図書館で取り組むべきものもある。Gje3では次のように，

使い分け情報を示し，そのような「宿題」は assignment とすることを示している。

しゅくだい [宿題]

(家庭で行なう課題) homework **U** (◆数える時は a piece of ~) ; (勉学上の課題) assignment **C**

別の例を挙げよう。道具・手段・方法を表す「～で」は典型的な多義語であり，(A)「包丁で肉を切る」，(B)「パソコンで文章を書く」，(C)「広島まで飛行機で行く」，(D)「喜びを態度で表す」などのように使われる。この「～で」をどのように英語で表現すべきだろう。

これらの「～で」は，(A)と(B)では「道具」を表している。(C)では「手段」を表し，(D)では「媒体」と言うべきものを示している。これに対して Gje3は，見出し語【一で】において，次のように使い分け情報を示している。

使い分け with は道具，by は手段を表す。on は物理的・比喩的に接触を意識する。in は様態・方式を意識する。through は媒介を表す。

その上で，Gje3は次のように(A)～(D)の英訳を示している。(A) cut meat with a knife, (B) write on a computer, (C) go to Hiroshima by air [plane], (D) show one's joy through one's behavior [attitude]

生徒がこれらの記述を読めば，使い分けのポイントを理解し，自分の考えや感情を最も適切に表現する前置詞を選ぶことが求められていることに

気づくだろう。上の例でいえば、(B)の「パソコンで文章を書く」を英語にする場合、生徒が「接触」を意識せずに単に「道具」として表現したいと考えた場合には、write on a computer の代わりに write with a computer と表現できることが分かるだろう。

Gje3には、生徒が、最も適切な表現を選ぶ手助けをする「使い分け情報」をできるだけ示すようにした。しかしこのように書くと、たとえ使い分け情報を示したとしても、複数の選択肢を示すと生徒が混乱するのではないかと危惧する向きもあろう。「英語表現」の教科書の練習問題は、穴埋めや整序問題などのように正解が1つに決まるものが非常に多く、和文英訳や自由英作文のように解答が複数あるものが少ないのも、そのような感覚が強いことの証左だろう。

しかしながら、複数の人が、あるときに同じことを考えることは、まずない。異なる人が使う英語が異なるのは当然である。生徒が、本当の意味で英語を自分のものにするには、自分の思いを表現する文型・語句を自分で探す習慣を身につける必要がある。Gje3は、生徒が自分のことばを探す時の指針を示すように編纂した。

②普通の英語を知ることができる

英語を聞いたり読んだりする時、私たちは様々な英語に触れることになる。その中には、「しゃれた表現」がある。私は大学生の頃に、日本人による、英語の学習方法に関する講演を英語で聞いたことがある。その最後に彼が言った I hope I have given you a shot in the arm. が心に残った。G5が「元気づけるもの、刺激剤、景気づけ」と定義する a shot in the arm という表現を使い、この講演者は「皆さんが英語の勉強をやる気になったことを願っている」と述べたのである。私は、この表現を「しゃれた表現」と感じ、しばらくの間、得意げに使った。

しかし、いま思えば、そのような比喩表現は受

信用の知識とすれば十分である。「しゃれた表現」を発信型の英語で使うと、そのような表現をししば使うことになり、結局、その表現だけが浮き上がってしまう。実際、a shot in the arm は講演で使うにはくだけた表現であり、「悪目立ち」している。

私たちが使うべき英語は、英語を母語としていない人でさえも、聞き返したり読み返したりする必要のない英語である。a shot in the arm のように、特定の表現だけが聞き手の心に残ることがない英語である。そのために、Gje3では、ネイティブ編纂者に「しゃれた英語」ではなく、彼らが毎日のように使う「普通の英語」を用例として示してほしいと依頼した。上の例で言えば、Gje3は見出し語「やる気」の項で次の用例を示している。

先生にほめられてやる気が出た

A teacher's praise motivated me.

もし生徒が「皆さんが英語の勉強をやる気になったことを願っている」を英語で表現するならば、Gje3のこの英文を参考にして、I hope my talk today has motivated you to lean English harder from now on. のような英語を使うようになってほしい。

生徒が英語を学ぶ重要な目的は、彼らが「自分の英語」を作るための正しい方法を身につけ、進路に応じて、必要な努力を積み重ねるための土台を作ることだろう。そうであるならば、ある日本語に該当する英語は1つである、と生徒に思わせるような英語教育は現実的とは言えないのではないか。「しゃれた英語」を「英語らしい英語」と持ち上げる英語教育は、コミュニケーションの本筋を外れているのではないか。

ある日本語に対する英語は生徒の数だけある、と主張し、普通の英語が英語らしい英語だ、と教えることによって、英語教育の花は咲く。Gje3がその肥料になれば幸いだ。

(なかむら みつお・関西大学教授)